
【《あゆみかん短編集 1》】

あゆみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【《あゆみかん短編集1》】

【Nコード】

N8959D

【作者名】

あゆみかん

【あらすじ】

【ジャンル色々短編集1】 作者に捨てられた話たちです。初めての方も優しく歓迎です。たまに黒くてもお許し下さい。各1話はだいたい数分程度です。H20/12/31でいったんシメ。『2』へ続きます。

札束の恋（恋愛？）（前書き）

亡者どもの嘆きをどうぞ。

だからか黒いのが多いような。

グロ・エロ・ヒドイのは無いです。ご安心を。
初心者の方にも優しいはずです。

札束の恋（恋愛？）

薄暗いワンルームの中で。食い入るようにパソコン画面を見つめる札束くんひとり。

札束くんは、あるミュージックビデオの動画の虜になっていた。

画面の中の彼の名前はマイケル・ホーリクス。昔に音楽活動していたイギリス人です。札束くんは彼の、くるくる移り変わる表情や笑顔の魅力にメロメロになり、恋心が芽生えてしまいました。

でも自分は普通の札束。百万円です。この種別を乗り超える恋愛なんていうのは無理があるのです。たぶん。

札束くんは、ちゃんとその事はよく分かっていました。そして所詮は叶わぬ恋なんだと、諦めていました……。

「なら……なら、せめて」

札束くんは、このミュージック・ビデオを購入する事にしました。このビデオを抱いて一緒に寝たりしようとか、そんな事を考えていました。とにかくどんな形でもいいからずっと側に居て欲しい……。札束くんの苦しい気持ちは、何処にも行く所が無かったのです。だから……だから、せめて……！

2日後。ピンポン。

ネット注文した荷物が届きました。もちろん、あのミュージック・ビデオです。

札束くんは嬉しくて嬉しくて、飛び跳ねながら玄関へと駆けて行きました。

待ち遠しくて待ち遠しくて。決して叶わぬ恋だけど、これですっ
と一緒に居られるんだねと。札束くんは、張り切って荷物の受け取
り印にサインをしました。『SATSUBABA』と。

「まいど〜代金引換です」

札束くんは宅配のお兄さんに もらわれて行きました。
相変わらず薄暗い部屋の中には。ポツンとビデオの入った小包が
ーっ。

……アレ？

《END》

札束の恋（恋愛？）（後書き）

【あとがき】

作者、イギリス人にハマった影響が小説に。動画の向こうの彼に会う方法を考えたりしています。時々。

いっそマイクロチップを私に植え付けてくれと知り合いに相談したら「もうすでにされている」とか言われる始末で。

はあ〜（ため息）。

ここではボツになった理由などを暴露しますが、今作は主人公が札束の為、共感を得られないという理由からです。と言いますか、コレってポーズラブ？

ええ〜@

作者、札束大好き。音の響きがいい（それだけか？笑）。

読了ありがとうございます。
感想もお気軽にどうぞです。

今日のおかずは（ホラー）

今日のおかずは何

ある夫婦の夜の食卓。

勤めの会社から帰ってきた旦那は着替えて楽な格好になると、新聞を広げてリビングのソファに腰掛けていました。キッチンでは妻が、食器や箸の用意をカチャカチャと。炊飯器がピーと鳴って、ご飯が炊けた事を元気よく高い音で知らせています。

リビングのテレビでは今日も、物騒なニュースが報道されています。事故、強盗、横領、詐欺、虐待、それから……。

「まったく、ひどい世の中になったもんだ」人のよい旦那は嘆きま

す。

「そうね……」
キッチンで妻はそう呟きながら、「あなた。ご飯の用意が できましたよ」と。

旦那に呼びかけました。

「さて。……ん？」

テーブルについた旦那は首を傾げました。箸と、マグカップに入ったお茶と、それから……。

お茶碗に入った白いご飯。その上に。

「これは……何だ？」

何とご飯の上には ふりかけのように金粉が かかっています。しかも、おかずはありません。ご飯とお茶だけです。

「どづいつ事なんだ」

旦那は問いかけます。妻は向かいに座りました。それから一瞬の間を置き、妻はボソリと言いました。

「最後の晚餐」

最後の……

……

旦那は妻の向こうの、キッチンの方を見ました。

キッチンに置かれていたまな板の上に。キラリと小窓からの月明かりに照らされて光るモノ、それは……。

……包丁。

《END》

今日のおかずは（ホラー）（後書き）

【あとがき】

ブラックエンドで笑えなさそうなんでボツになりました。それと元々今作、もっと短かった話だった為に膨らまするのがしんどくてという理由も。いやそれ以前に面白くないからというのも色々。

ショートストーリー過ぎるのもあります。

3行で終わったり。どうしようかと考えるソレたち。

まあそのうち何とかします（できるかなあ）。

福笑い（無ジャンル）

現代の子供たちは、『福笑い』を知らないらしい。

用意するのは、のっぺらぼうの顔が描かれた一枚の紙と、目・鼻といった絵が描かれ形にそって切られた各パーツ。一人が目隠しをして、顔がちゃんと人間の顔らしくなるようにパーツを並べて遊ぶのだ。周りの子に「そこじゃないよ、もっと右」と教えてもらった。りして完成させる。意地悪な子は嘘を教える。完成した後、目隠しをとってみると口が額の所についていたりして変な顔が出来上がってしまったりする。

そんな正月遊びだった。

さて、説明を終えた所で、こんな話をひとつ。

高島由紀夫は毎日、通りかかるたんびに顔のパーツを落として困っている女を見かけていた。

ココは深緑公園。敷地面積は大きく、レンガが規則正しく並べられて出来た道や、明治の文明開化を思わせるような作りの外灯。公園自体の歴史は古かった。でも綺麗に市に管理されている。

時刻は夜7時。高島は会社帰りの途中でこの公園内の道を通る事になっているのだ。少しでも近道を、と思っていた。

そこでいつも。

道に沿って4人掛けほどの長さのベンチが転々と並んでいる、そこ辺りにいつも。

背が高めで、白いワンピースを着ている女。年はまだ若いかわからない。名前も知らない。

というか、いつも顔の何処かのパーツが無い。

キョロキョロと地面ばかりを見て探し物をしている素振りだった

ので、高島は察しがつき話しかけてあげた。

「もしもし。コレですか？」

高島は、たまたまベンチの横に落ちていたのを見つけた『鼻』のパーツを拾い、女にさし出す。女の顔は明るく、パツと瞳を輝かせた。とても嬉しそうに高島を見た。

「ありがとう！ なくしたと思ってとても困っていたの！ 交番に行こうか迷っちゃった」

高島はお礼を言われ、よい機会に聞いてみる事にした。

「どうしてそんなにパーツを落とすのですか？」

すると女は、はあ……と深々とため息をついた。「それが」

ベンチの上に置いておいた自分のカバンから、『何か』を取り出し高島に見せた。

「のりでくつつけているんですが。すぐとれてしまっって」

『何か』とは、何処でも普通に雑貨屋で手に入る、何の変哲も無いスティックのりだった。

高島は「ははあ」と頷く。「そんな安物で済まそうとするからですよ」

今度は高島が、自分のカバンから『何か』を取り出し女に見せた。「私の会社で作っているコレを差し上げます。どうぞ」

高島は自社開発製品『くつつくん』を女にあげた。

見た目はスティックのり。ただし従来の物よりかなり強力だ。入れ歯につけたら絶対とれない。

『くつつくん』を渡された女は、さらにもっと喜んで飛んだ。飛び跳ねた。

「いいんですか！ ありがとうございます…！」

「さっそく使ってみたらどう」

「そうですね」
女、高島の言う通りに。

後日、また公園で高島は女と再会する。何と女は高島を待ち伏せて、気に入った『くつつくくん』を10ケース注文したいと言った。そうして高島は顧客をゲット。ただし妖怪。

後日、感謝の言葉と共に結婚・出産の知らせまで書かれた絵ハガキが高島まで届く。

「そうか。結婚したのか。よかったな」

自分の家に居た高島は、絵ハガキをそつと自分の机の引き出しにしまった。

もうパーツを落とす事も無いだろう。高島は微笑ましく口元がほころんだ。

子供も、パーツを落とすんだらうか。そんな事を考えた。

《END》

福笑い（無ジャンル）（後書き）

【あとがき】

お、ちよつと明るい話だ　でもボツ。

何故か？

作者、含み笑いの方が好きなので。……違うか。

おもちゃ箱チャーリー (童話) (前書き)

黒くない。

おもちゃ箱チャーリー（童話）

ぼくには秘密があるんだ。ママも知らない素敵な秘密。
ぼくにはね、誰も知らない特別な友達がいるんだよ。

名前はチャーリー。目には見えないんだ。透明なんだよ。

ぼくが気の病に侵されてるって？ 違うよ。

だってホラ。おもちゃが宙に浮いているもの。もちろんタネも仕掛けない。

ぼくが小さいボールをポンと投げれば、チャーリーはちゃんとキヤッチして投げ返してくれる。

白い紙を広げれば、見えない手でクレヨンを持ってぼくの描いたへたくソな絵の横に描き足してくれるんだ。

姿は見えなくても実際にチャーリーが動かした物は目に見えてい
るんだよ？ これが気のせいだと本当に思う？

でも誰にも言わない。言っちゃいけない。ママはびっくりして腰
を抜かしてしまうから。

チャーリーは日が沈む頃になると、おもちゃ箱の中へ帰ってしま
うんだ。

「じゃあね。マモル。ボクはそろそろ帰らなくちゃ。ママが心配す
るからね」

そうチャーリーは言う。

「淋しいよチャーリー。……明日も来てくれる？」

すぐにチャーリーは答えてくれた。

「もちろんさ。でも約束してね。必ずボクが帰ってしまった後は、広げてしまったおもちゃのお片づけをするんだよ？ 全部箱の中に戻すんだ」

「うん。必ずお片づけをするよチャリー。だから心配しないで。ぼくは“イイコ”なんだから」

チャリーがおもちゃ箱の中へ帰ってしまったと、ぼくは箱の中へ手に取ったおもちゃを投げ入れてお片づけをする。面倒だなあと思っけれど、チャリーとの約束は絶対に守るんだ。破らないよ。

だってチャリーが言ったんだ。

「約束を破ったら、もうマモルとは遊ばないからね」

次の日。ぼくはおもちゃを箱の外へと放り出す。今日はチャリーと何をして遊ぼうか。

電車のレールを繋げようか、ブロックでお城を作ろうか。ねえ、何して遊ぶ？ チャリー。

……でもいつまで経ってもチャリーは、やって来なかった。

ぼくは機嫌が段々と悪くなって、しまいにはすねってしまったんだ。

「チャリー……」

体育座りになって、おもちゃ箱をずっと見ていた。何の返答もない。

淋しいよ、ママ……。

いつの間にか、寝てしまった。

目が覚めたら、ママがいた。

「目が覚めた？ マモル。泣いていたの？」

ママの優しい顔。「ママ」

ぼくはママにすぎるようになりがみついた。ママはニコニコと笑っていた。

「さあ帰りましょうか地球へ」

「え？」

地球？

ぼくはキョトンとしてママの顔を見上げた。

「そうよ。マモルは地球で生まれて、ママがここに連れて来たの」
そんなことをママが言った。ぼくは驚く。

「どうして？ ぼくはずっと一人で、淋しかったんだよ？」

「ごめんねマモル。わけがあったの。でも もうそれもおしまい。マモルはこれからお友達をいっぱい作って、お遊戯やお絵かきをしたり、お歌を歌ったりするのよ。もうマモルは淋しがることなんてないの。ママがずっとそばにいてあげる」

本当に？

ママと一緒にいられるの？

ぼくが首を傾げて疑わしい顔をしたからか、ママはクスリと笑ってぼくの頭を撫でた。

「ずっと一緒よ。さあ早く、あのおもちや箱みたいな地球に帰りましょう」

ママに連れられて。

ぼくは『ロケット』に乗って、星を飛び立った。

ここは何ていう星だったんだろう。でももういいや。
ぼくがきつと大人になったら、全部わかることなんだ。きつとそ
うだよ。

チャーリー、ごめん。

本当は君に、お別れを言いたかった。でも、言えなかったね。
いつか、また。

僕はここへ遊びに来るね。バイバイ、チャーリー……。

……。

……

…… 荒廃した星に取り残されたチャーリーは思う。
かわいそうな子どもたち。

力のコントロールができない子どもたち。

マモルは手を使わずに物を動かせた。

聞こえるはずのない声が聞こえた。

チャーリーは本来、物を触れないし声も発せられない。

マモル、全ては君が自分で。

チャーリーという者を作り上げてしまったにすぎないんだよ。

でももうそれも終わり。

君が超能力を使える時代は終わりを告げた。

もう地球でママを困らせることはないんだよ。

君には本当の友達と未来が、

あの青い宝石箱にいっぱい詰まっているからね……。

《END》

おもちゃ箱チャーリー（童話）（後書き）

【あとがき】

前題『おもちゃのチャーリー』。

おもちゃじゃないなあと気がつき改題。

最近は黒い話を書くが多く。この話は黒くはないなと思ったらここにポイト。そこが黒い。

意外性がないのでここ行きになりました。お眠りなされよし。ゴーン。

ありがとうございました。

あり？（無ジャンル）

また怒られた。

どうして僕はいつも怒られてしまっただろう。

閑散とした田舎の駅。僕は家路に着くために、駅のホームで電車が来るのを座って待っていた。

電車が来るまで あと8分。田舎だから30分に1本しか電車が来ない。これに乗れなかったらシヨックだ。駅周辺には駐輪場と、片手を上げた少女がパンダと戯れている変な銅像しかないっていうのに。どうやってあと30分を過ごせっていうんだ。

……あー、携帯電話があったな。暇はつぶせるか。いや、まあ、それはそれとしてだ。

僕は落ち込んでいる。バイト先のパートさんに怒られたせいだ。

僕は雑貨シヨップのレジを任されていた。バイトを始めてまだ3日目。レジを打つのに必死で、あんまり気持ちにも周囲にも余裕はない。

ちょっとレジに お金をしまい忘れただけで、勤続6年にもなるらしいパートのおばちゃん、蟹本さんが見つけて怒ってカンカンだった。

「お金に失礼よ！ 英世さんに謝りなさい！」

訳のわからない事を言う。

僕が悪かったよ。もうそんでいい。

僕はため息をついて荷物のリュックを抱えた。何だかイカ臭い。

何故だろう。

ああ、湿気が多いからかな。6月だしな。梅雨どきで、雨が最近よく降る。蒸し暑い。きつと汗つかきの僕だから、汗染みたりユツクが腐ってんだろう。イカのおいじゃないな。今度はイカに失礼を働いた。謝ろう。僕が悪かった。

「はあ……もうダメだ」

嘆きでいっぱいだ。どんよりとした曇り空。堂々と人の迷惑おかまいなしに煙草をベンチの側に立ってスパスパ吸っている、スーツを着たサラリーマン風のおじさん。

僕が暗い気持ちになるのを応援しているかのようにだ。

「ん？」

気がついた。

僕が座るベンチと、数歩先に伸びる白線との間に。

一匹のアリが居た。

アリは大きめの体をしており、ウロチヨロウロチヨロとさ迷っている。

一体、何処に向かおうとしてんだろうか、と……。

ジツと見守り続けていたら、アリはお菓子の小さいくずみたいなものを見つけて、それをヨイシヨと運び出したではないか。

たった一人で……いや、一匹で？

アリって集団で連なって活動したりするイメージがあったけれど、

そつだな、単独で行動する事もあるかもしれない。

よく見ると、自分の体と比べたらくずって大きくないか？
凄いなあ、きつとアリ世界では重いんだろうに……。

なんて。

適当な事を考えていたら、不思議だな。僕は微笑んでいた。

どうやら目の前で一生懸命に食糧を運ぶアリを見て、元気が出てきたらしい。

僕も頑張らなきゃ、って。

アリは冬を越すために今から食糧をためるんだ。冬のために。未来のために。

そつだな。

こんな事でクヨクヨしてたって仕方がない。まだ僕はこれからじゃないか。

バイトは、これから続けていくんだから。

『一番線に、電車が……』

アナウンスが流れた。しばらくしてから電車が来て、ホームに入ってくる。

アリのおかげで暇がつぶせた上に元気をもらったな。

ありがとう、アリ。

僕は感謝した。

そして僕が立ち上がるうとする前に、側で煙草を吸い終え足元に捨て、足で踏みつけて火を消したおじさんが僕の前を通過して行った。

アリの食糧、おじさんに蹴られる。

数メートル先へと、飛ばされていった。

……そんなあ。

『雪名井駅〜雪名井駅〜』

プシューッと激しい音を立て、電車の開いたドアからまばらに人が降りてきた。

もちろん、電車に乗る僕。

やがてドアは閉まり、ゆっくりと電車は走り出した。

遠ざかるホームの景色。小さなアリの体なんて見えるはずがない。

きっと探せば見つかるよ。

食糧も未来も。

いつの間にか、雲と雲の隙間から太陽の光が。

頑張れ、アリと僕。

《END》

あり？ (無ジャンル) (後書き)

【あとがき】

えーっと。

3割 実話です。

ケガノビル（コメディ）（前書き）

髪が伸びたなあ……作者、頭を重く感じる日々。

夏が始まる前に切りに行こうかなあと思っていたら夏の方が先に
来てしまった。

もう秋が来るまで待つかな。

では、どごぞ。

ケガノビル（コメディ）

男は走った。ビルの最上階をめざして。

非常用階段を駆け上がる。一段飛ばしでも構わない。息が切れても構わない。

何でもいいから上をめざせ。止まるな。止まらない。男は走る。

男の毛は伸び続けていた。

頭から。眉から。鼻から。耳から。腕から。足から。省略。

止めてくれ。誰かこいつを止めてくれと。

男は祈る。まだ階は5階。あと2階。まだか。まだなのか。

すでに自分の身体運動能力は限界を超えている。息は荒く、本当は一度足を止めて休みたかった。けれどダメなのだ。一刻も早く、という思いの方が強すぎて。足は動き続ける。

「ぐはっゴハアッ」

吐き出すように息をついてなおも前へ上へと駆け上がる。

段々と伸び続ける毛は、真逆に下へ下へと。重力に従おうと男の邪魔をして、垂れ流れていた……。

抵抗を受けて。それでもやがては辿り着く事ができた。

行き着いた果ては、鉄の汚く重そうなドアだった。自分の、存分に、自由に伸び続けた毛の集団に絡まれまくりながらも、かき分けてノブをひねる事に成功する。ドア自体は簡単に開いたのだった。

「開けた視界。屋上だった。」

一見、何も無いコンクリートの地面がめいっぱい広がり、奥に手すりがあるだけの空間かと思っただらだ。

ポツンと、『救急箱』だけが地面のそこにあつた。

「早くバンソウコウを！」

男は焦る。落ち着けと思いつながらも箱の中からバンソウコウを。右手の親指の先に巻いて貼った。「もう大丈夫だ。出血は止まるぞ、これで安心」

用の済んだ救急箱はフタを閉じられ元の状態に戻される。男は自分の毛の束を箱に挟まれまいとちゃんと気を遣っていた。

そして男は屋上を去った。ドアを閉める際に、伸びすぎた毛髪をしつかり屋内へと引っぱりながら。ズルズルと。「ふう。伸びてうっとうしいな……床屋へ行くか」

ボタン。鉄のドアは、やっと閉まった。

自分の伸びた毛を地面に引きずりながらも。男は、これからエレベータに乗ろうとしている。

毛生え開発会社『ケ・テクノ』。実験中はトラブルが多い。ケガをした場合は屋上に設置してある救急箱をご使用下さい。

男は書類の整理中、紙で指先を切っただけだった。

《END》

ケガノビル（コメディ）（後書き）

【あとがき】

あらすじを書くのが面倒だからという理由でココに放りこまれた話。

コメディーもココに増やした方がいいんでしょうか。いいような気がしてきた。むしろ書け。えー。

作者、一人漫才。

酔拳ドクター（コメディ）

小さなアパートに暮らしているママとボク。

幼稚園から帰ってきたばかりで、さあこれからボクは服を着替えてママと近所のデパートに買い物に行くぞと用意している所だった。ボクがどのおもちゃを持って行こうかと、箱の中から緑一色のガモレンジャー人形を取り出し手に取った時だ。ボクの後ろで、ドサツと大きな物が落ちるような音がした。

え、と振り返って見ると。ママが台所で倒れていたのだった。

「マ、ママ!？」

ボクはびっくりしてすぐに駆け寄る。ポンポンと、うつ伏せだったママの肩あたりを叩いた。「う……う……う……」

苦しそうに息を吐くママ。ボクは怖くなって、ママの体を揺さぶる。「ママ、ママあ！」

パニック。ボクは混乱して、ママの名前ばかりを呼ぶ。どうしようと思っていた矢先だった。

パリーンンッ！ ……

凄まじいガラスの割れる音が少し離れた所でした。

涙でベチヨベチヨだったボクの顔は、音のした背後へ振り返る。そうしたらだ。

ビュオオオオ……

風がボクの頬に当たった。ボクと、うつ伏せに倒れているママの前には。

割れたベランダのドア、ガラスの穴から入ってきて、『侵入者』が立ちはだかっていたのだった。

白衣を着た背が高く細い体つきの男の人。

黒髪は襟足あたりで外ハネだ。片目には眼帯を着けている。

そして頭には額帯反射鏡を。首から聴診器をぶら下げている。

片手にはアルミ製スーツケース。黒のスラックスを履いた細い足先には黒の紳士靴。

よく見ると、手には薄い白のゴム手袋をはめているようだ。

ん？

胸元には、もう一つ首から何かを下げている。

カードケースが紐でぶら下げているようだ。何かが書いてある。

何だ……？

『酔拳ドクター』

……？

……ダメだ。ボクには、漢字もカタカナもまだ読めない。

でも。ボクにはすぐにわかったんだ！ この、後ろから風に全身打たれつつも堂々とベランダからやってきたヒーローの正体を！

「お医者さんだね！」

ママが倒れた事に気がついて、飛んできてくれたに違いない！

……ボクは そう思った。

「やあ正太郎君。はじめまして。アチヨー！」

お医者さん せんせいと呼ばう。せんせいは、円を描くように片手片足を回しながら、ボクらの所に近づいてきていた。

変わったせんせいだなあ。いいや、そんな事は。そんなつまらない事より、今はママの一大事なんだ。早く診てもらわなきゃ！

せんせいは、ママの傍らに座ると。胸やオデコに触れて顔色を窺って、白衣のポケットから取り出した細い棒状のペンライトで口の

中や目の瞳孔を確認した。聴診器で心臓の音を聞いたり、脈を測ったりも している。

こうして言うと、普通のお医者さんの診察風景なんだけれど。せんせいの場合は ちよっと違った。

全ての診察は優雅だった。

ママの体の箇所箇所に触れるたび、必ず手は大きく円を描いた。指のうち、小指と人差し指と親指を立てながら。

大きく円を描いたかと思ったら、それは手打ちで麵を仕込むかのような動きに変わったり、螺旋を描いたり、何と足までその一連の流れに合わせて立ったり片ヒザを立てたり、背中を反ったり。ええと……これは そう、新体操にも見える。せんせいの体はとてもしなやかで柔らかかった。スラックスの股とか裂けないだろうかと心配するよ。

そんな踊りながらのママの診察を終えたようだ。気になるのは、たまに『ヒック』と せんせいがいしゃつくりをしていた事だ。そして息が酒臭い。大丈夫なのかなあ。子どものボクにはわからないけれども。

「これは……アチョー！ ……貧血だね。大丈夫さ！」

せんせいは、手先で狐に似た形を作りながら、また優雅に自分の腕と腕を絡ませるように動く。とても滑らかに。

「ひんけつ!? ママは大丈夫なの!？」

「ああ大丈夫さ！ とにかく布団を敷いて安静にさせるんだ！ アチョー！ ……ヒック」

ボクは言われた通りに布団を敷く。そしてせんせいの手も借りて、ママを布団に寝かせた。

せんせいに言われて、タオルを水で濡らしに行った。その間、せ

んせいはスーツケースから白い紙とペンを取り出し何かを書いていた。

ボクが戻ってママの額に固く絞ったタオルをきれいにたたんで置くと、んせいが書き終えた紙をボクに折って渡す。

そしてスツクと立ち上がった。

「それでは これにて失敬するよ！ オチャァー！」

ボクが声を上げる間も与えないまま、んせいは再び割れたガラスの穴から外へ。そしてベランダの手すりを飛び越えて落ちていった。

ここは2階なんだけれど。

「んせい〜！」

『命』のような全身ポーズで羽を飛ばたかせるように飛んでいったかと思つた。最後まで優雅だった。スキのない、あの身のこなし。ただ者じゃない。

白衣を着ていなかったら ただの酔っ払いかも しれない。パパみたいだ。

「う……」

ママが喘ぐ。ベランダ付近で何処へ消えたんだとんせいの姿を捜していたボクは、慌ててママの所へ駆け戻った。

「ママ、平気！？」

また涙が復活しそうだった。

ママは小さな声で、切れ切れに何かをボクに伝えようとしている。ママの口元に耳を近づけて、「ママ、ママあ」と呼んだ。ママはこう言った。

「きゅ、救急車……」

電話したらすぐに救急車が来てくれて。ママは担架で運ばれてい

った。

救急隊員のおじさんが、ボクの頭を撫でてくれた。

「よく救急車をすぐに呼んでくれたね。偉いな、ママはすぐ治るからね」
と。

ボクは涙を拭きながら、おじさんに黙って手に持っていた白い紙を渡した。

さっきせんせい gave くれた紙だ。おじさんは不思議そうに紙を受け取って広げる。

「……これは」

みるみるうちに、おじさんの様相が変わった。そして「オイ」と、場に居た別の隊員の男の人を呼んだ。

「また現れたらしいぞ、『酔拳ドクター』」

おじさんが言うのと、呼ばれた若い隊員の方は驚いて声を上げた。

「またですか！……全く もう！」

ボクはおじさん達と一緒に救急車に乗り込もうとついていったんだけれども。その途中でおじさん達はこんな会話を続けていた。
「警察もすぐ来るらしいです。全くお騒がせな奴ですね。ほんとにもう」

「今回は不法侵入罪だな。仕方がないが」

「悪い奴じゃないんですけどね……ふう」

……

子どものボクにはわからない事だらけだ世の中。

せめて紙に書かれていた字が読めたらなあ。

ボクはお隣に住んでいるおばちゃんと一緒に、夕方の空が赤く染まるうとしているなか、救急車で病院へと向かって行った。

ボクには読めなかったけれど、紙にはこう書かれていたらしい。

『アルコール性肝硬変・肥満・歯周病・可逆期外反母趾・悪心・ぎっくり腰・円形脱毛症・睡眠時遊行症・痔・水虫の疑いあり』

赤トンボが空いっぱい広がって飛んでいた。

《END》

酔拳ドクター（コメディ）（後書き）

【あとがき】

初めて『62日以上更新されていません』と赤字で書かれ。

作者 気分的に焦り、急ぎよ生まれた作品。

他の短編のサンタといい大魔王といい、『おじさんと僕（子ども）

』シリーズができてしまうような気がした。要するにパターン化

? ええ〜@

これから ここには投稿日を入れておく事にしよう。そうしよう。

H20・8・17・作

呪いの書（エッセイ）

理由は省略させて頂くが、嫌がっている私にヤフオク（ネットオークション）をさせようとしている兄。

私は嫌で嫌で嫌で嫌で嫌で仕方がなかった。悩み続けて朝泣きしてしまっただけだ。

私は考えた。いつまでも悩んでいたくない。これから仕事に行くのだ。こんな目に隈か腫れくまがボヨンとできたようなズンドコ暗い顔で接客してたまるものかと。

出勤時刻まではあと15分。『出勤時刻』と『借金地獄』は読みが似てるなあと思いつつ、私は裏が無地である新聞折り込み広告とシャーペンを持って居間のコタツ机の上でガシガシと次のように書き出していった。

やふおくいやだ やふおくいやだ やふおくいやだ やくおふい
やだ やふおくいやだ

途中、『やくおふ』になりながら。私は正直な気持ちをつらつらつららと書き殴っていった。こうして体の中に溜まっていた負の膿虫を吐き出すのだ。きっと後は爽快になろう。私は明るい未来をいつも信じている。

15分で紙面半分ほどが字で埋まった。もう時間が来た。さてこれから仕事である。

残りの半分は帰って来てから埋めよう。

中途半端にスッキリした私は、仕事先へと向かった。

仕事先では。テレビで昨日に起こったニュースが流れていた。そのうちの一つが目にとまる。

『脅迫メールで主婦逮捕。“氏ね（しね）”“殺す”と一万個を書き送る……』

どうやら携帯画面いっぱいに脅し文句を書き連ね、相手に送信を数回行ったそうだ。完全なる嫌がらせ。

ほほう、と私は茶をすすりながら椅子で踏ん返り返ってテレビを見ていた。

「はて、どこかで……？」

私は首を傾げる……既視感^{デジャビュ}？ お茶はぬるかった。

仕事から帰り紙面の残りを続きで埋めた私は、その紙に『呪いの書』と名を付けた。

火をつけたらよく燃えるだろうと思う。

《END?》

呪いの書（エッセイ）（後書き）

【あとがき】

やはり黒かった。ううむ。

まだ自分が手をつけていないジャンルに挑戦してみようと思って、禁断だったかもしれない『エッセイ』を書いてみた。いつも黒い訳じゃないはず。

……はず。

H20 . 1 1 . 1 4 .

あくまのコップ1500えん(コメディ)

「あ、くまのコップだ！」

ある日、雑貨ショップで子どもが言いました。その手に取ったのは青地に白の、クマのコップ。しかもお値段は1500円です。たいたくま柄でもないのに、何て高いんでしょう。クマは意味もなく微笑んでいます。楽しそうに。白目をむいて。

子どもはひとり言を言います。

「うーん欲しいな。なんでか欲しいな。欲しいな欲しいな。欲しいな。欲しいな。どうしてだろう。どうしてこのクマは、何をボクに訴えかけているのだろうか……訴えるといえば、以前停めておいたバイクがいつの間にかベンツになり代わり、上に駐禁の紙が貼ってあった日にゃ、ボクはベンツの持ち主をさがし出して『何駐禁貼られとんねん』って西の人風にツッコむべきなのか、それとも……警察に行つてかくかくしかじかだと説明して『そりゃアンタ駐禁の場所に停めとくのは悪いことだよ』と諭しツッコまれるのか　　どつちなんだろう……？　例えばだけど……」

と、好奇心旺盛な子どもは小っぱけな頭で深く考え、思い悩み、ついにそのうさん臭いコップをゴールドンカードで買いました。とてもはしゃぎ、喜んで持ち帰ります。

持ち帰って、子どもがスヤスヤと寢床についた、その夜です。
パリーン。

……誰も居ない台所で、あのコップはひとりでに台の上から転がり落ちて。割れました。

そう、……ひとりです……。

お母さんの置き方が悪かったのです。

《END》

あくまのコップ1500えん(コメディイ)(後書き)

【あとがき】

大掃除してたら、発掘いたしました今作。
子どもってよく思考脱線しませんか？

あくのじゅうじか、なんてのも子どもの時に流行ってましたね。

そいでは、また来年【短編集2】にて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8959d/>

【《あゆみかん短編集1》】

2010年10月25日02時30分発行